

左利きの彼女の奇妙な世界。

七瀬 佑衣
nanase yui



彼女の奇妙。

夢喰い虫。

苺ミルクのソープが欲しかった。

最近になって、ネットで販売している苺ミルクのソープを2つばかり買った。

香りの強い、クセになりそうな丸いソープだった。

バスルームの片隅で、まだ香りを楽しむかのように所狭しと並んでいる。

苺に埋め尽くされたバスルームをいつしか意識するようになった頃、苺の香りはバスルームでは当たり前のようにになっていた。

1度、誰かが苺ミルクのソープを使おうとしていたことがあった。

開けようとしたところを、偶然見かけた。

大切にしようとしていた苺ミルクソープが、開け放たれる時に少しの喜びを抱いているように感じた。

「開けないで。大切にしてるんだから」

お母さんが少し申し訳なさそうに笑った。

「あら、そんなこと。お母さんだって使ってみたかったんだもん」

「やめてよね、私の分使うの。これは大切なんだからね。お母さんの分あるでしょ、いつも使ってるの」

苺ミルクソープを引き出しの奥にしまうと、お母さんは少し楽しそうに笑って理解したように言った。

「お母さんもフルーツソープ、買ってみようかしら。それだと、フルーツでいっぱいバスルームになるかしら」

クスクス笑いながら、お母さんは私の頭を数回ポンポンと撫でてくれた。

バスルームからお母さんの姿が消えると、小さなため息をついた。

苺に埋め尽くされたバスルーム。

シャンプーとトリートメントの香りは、いつも動くたびに辺りを包んだ。

ソープは、まだ使っていない。

苺は、いつしかどの場面でも私の周りで頻繁に見かけるようになった。

苺の香りがいっぱいの、そんな毎日を送っていた。

苺ばかりの私は、そこで少しの幸せを感じることができていた。

バスルームや部屋の真ん中でいつも思うのは、いつか苺がなくなる日を恐れて、苺の夢ばかりを見ていたりする自分だった。

夢はいつしか、夜の漆黒に導かれていく。

赤色の苺だらけの掛け時計を見た時、ちょうど大きな苺の実をつけた針で2時を指した頃だった。

ベッドの上で雑誌を広げていたら、苺の香りに包まれた。

何も感じることなく、ただ少し眠気に襲われていて、ただ眠りたくない気分で雑誌の1ページをめくった。

眠いのを抑えながら雑誌の中で笑うアーティストを見て、少し目を細めた。

数秒のうちに、瞬きはいつの間にか眠さに負けてしまっていて、閉じられた瞼が開かれた時に、そこで自分が眠っていたことに気付く自分がいた。

思わず、時計を眺めた。

2時を5分ほど過ぎていた。

冷めたコーヒーを一口飲んで、またひとつため息をついた。

苺畑のように、ベッドの上では苺がいっぱいの実をつけて、自分を夢の世界へと運んでくれた。枕に乗った大きな苺が、いつも幸せをくれた。

夢は、どこからくるの？

いつから、あたしは夢を抱くことができただろう。

いつからか、幸せは夢の中から始まった。

夢はいろんな幻想を見る。

世界は苺畑だけじゃなかったし、苺の香る毎日を繰り返した日常のようにはいかなかった。

怖い夢はいっぱい。

だって、苺に囲まれた世界でも、向こうの世界では苺がなかったりした。

怖くて、もう夢を見れなくてもいいと思えた。

夢は、苺を見せてくれなかったんだ。

きっと、どこかで苺ばかりを見つめるあたしを、悪い夢の中に住んでいる夜の住人は、あたしをそこに置いておきたくなかったんだ。

苺を見て、夢を見ていた。

毎日は、こんな始まりで。

終わりは、こんな夜の暗闇で。

毎日は、眠れない1日を過ごす憂鬱の中に、小さな不安から始まった夜の闇を想像して、そこに苺がないことばかりを祈っていた。

暗闇は、いつも目の前に現れる。

苺が消えた時、枕の上では大きな苺の香りが消えてしまった。

不安なんて、暗闇にはなかったなんて言うおいて、苺を見ると不安が消えてしまったかのようにして、暗闇はそこに世界を置くことはなかった。

灯りを、いつも消すことに怯えた。

だって、そこに安心なんてなかった。

大好きないつもの苺時計も、苺枕も苺ベッドも、苺パソコンも苺ケータイも苺お洋服も苺カップ

も苺ノートも。

夢を見ないから、そこに存在していられた。

夢は、あたしから幸せを奪い去ってしまうだけの、ただの夢喰い虫だ。

夢喰い虫に、苺なんて見えるわけがない。

夢喰い虫なんて、幸せだけ食べていれば、現実なんて必要ないんだ。

夢喰い虫のいる世界になんて、苺畑が咲くわけがないんだ。

夢なんて、いらない。

いつも夢を見るあたしには、夢喰い虫のいる世界なんて、ただの暗闇でしかないんだから。

部屋はいつも苺だらけだった。

いつも見るのは苺だけの世界だった。

だけど、現実はいろんなところへやってくる。

夢は、夢の中だけではないことに気付く。

現実だって、夢の世界と同じだと感じる時だってある。

苺が見えなくなったら、あたしは現実から逃げるようにして、夢の中へと希望を抱くのかな。

もしかしたら、現実にはあたしが在って、夢の中ではあたしがもういないのかもしれない。

苺畑は、いつも現実の中にあった。

だから、もし現実の中で苺畑が咲くこともなくなったら、きっとあたしはその頃になると夢を見てしまうことになるのだろう。

夢は、何のためにあるの？

あたしは、夢の中に夢喰い虫が現れないことを常に願っていた。

夢を見る時、いつも幸せを夢見ていた。

夢喰いは、虫にならずに済むのかな。

夢喰いの世界は、今もずっと夢の世界だけに留まっているのだろう。

みんなの夢を蝕む悪夢を見ることは、もうない。

ホントは、夢喰いなんて現実の中で抱いた人々の存在が、いつの間にか夢の中に忍び込んで、あたしたちの夢をずっと食べ続けていたんだ。

あの人が怖かった。

あの人に怯えた。

あの人があたしの夢を食べた人。

苺は、その時目の前でなくなってしまった。

大好きだった苺の夢を、もう見ることはないと感じた。

怯えは、どこからやってくるんだろう。

苺を探して、夢の中で泣いていた。

現実で、あたしは泣かなかった。

苺は、いつも目の前にあった。

夢は、もう見ることなんてないんだろう。
そこに、苺はもうない。
あの人が夢を食べていた。
苺は現実の中で夢に変わり、あたしの夢は現実の中で常に生きていた。
あの人の見る夢には、苺がない。
あの人がいるなら、現実の夢喰いでさえそこでは夢の中だと豪語できた。

苺は、あたしの毎日に常に存在する。
あたしは、幸せでいられた。
夢は見ない。
夢は現実さえも伴わず、いつしか夢を見ることでさえ幸せを感じないでいられる。
幸せは、ホントに現実の中にあるのかな。
夢を食べる夢喰いでさえ、現実では夢を見なかった。
夢はどこで見るとだろう。
いつも、どこかで苺の香りが漂っていた。
いつもの毎日は、苺だらけのあたしをいつも笑顔で迎えてくれた。
幸せは、夢を見ることなんかじゃない。
夢は、いつしか現実の中に溶け込んでいたりした。
苺は、いつも現実の中に存在していて、そこに夢を見ることもない。
苺は、夢の中では必要もなかった。
夢の中で、夢喰いが怯えた。
そこに、幸せはなかった。
夢喰いは消えた？
夢を忘れることで、現実には夢喰いを消したのかな。
怯えた夢喰いは、あの人の中で夢を見ることはあるのかな。
いつも、見る夢に現実はなかった。
だけど、夢の中に現実があったのかもしれない。
苺畑が、いつしかどこかの夢の中で咲いていた。
あたしは、いつしか見ることがあるだろうか。
いつもある苺と、小さな夢を見たことのある現実の自分と、少しの不安にかられるいつもの苺枕
の上で見る夢と現実の間で。

ただ、あたしはもう夢を見ることはなかった。

『夢喰い虫』／END.

夢を見なくなった夜。

窓を眺めていた。

空には月がかかり、今にも星が零れ落ちてきそうだった。

夢はいつか願いとなり、やがて星に願いを・・・なんて、そんな夢を見ているような、

そこにはもうあたしの夢がないように、

やがてまた夢を見るようになった頃、そこにはまた葛畑が現れるのだろうか。

あたしは、夢を見てもいいの？

誰かはきっと、夢の中にいる。

そこに、あたしはいなかったのに。

そこに、あたしはいようとしていた。

そこに夢があったように、

そこに、誰かはいなくなっていた。

葛畑が夢から消えると、そこにあたしは葛畑ばかりを夢見ていた幻想を、

時折見ることのある本当の葛畑を、ただの現実感の中に置いて、あたしはただ眠れないだけの夜を数えるだけになっていた。

ある日。

あたしは、ココアの味にホッとしながら、夜の闇を眺めていた。

そこに、月を見てみたかったし。

やがて、星は瞬かないことを祈ってみたり。

少し壊れたあたしの夜を、ただ見つめる羊がいたかのように。

白い壁は、あたしを笑って。

そこに微笑みという安らぎを与えてくれなかったりして。

時を刻むのは、買ったばかりの葛時計だった。

葛が時間を進めて、あたしの時間を刻んでいった。

夢は、いつ見ていたんだろう。

いつか夢から覚めた後、そこにはただ恐怖から逃れたあたしの現実があった。

月があたしを照らしていた。

涙は、いつか流れることを知るように。

現実で涙を流さないことを覚えた。

いつから、真夜中の月を見るようになったらう。

漆黒を意識するたびに、あたしを襲うのはきっと星ではないことを知っていたし。

月の灯りを浴びるように、そこに安らぎを求めたこともあったりした。

月のない夜。

あたしは、またある夢を見た。

そこに、あたしは立っていた。

涙も流さなければ、白い壁もそこにはなかった。

夢に苺畑がなくなったかのように、あたしは無心で苺畑があるかのようにして、ただ苺を探し求めていた。

そんなあたしに気付いた自分が、あたしを見ていた。

あたしは、いつも何を見ていたんだろう。

ただ、そこに苺を求めていたのに、あたしはそんなあたしが誰なのかを忘れてしまった。

月を探した。

星を求めた。

白い壁はあたしを笑うから。

ただそこにあってほしくないと願った。

苺時計は、そこにあるかのように感じた。

そこは、未来のないあたしの部屋。

羊は数えるためにあったんだとか。

静かな暗い部屋は、あたしを壊して羊を見えなくして、そこに時計の針は大きな夢を描くように、ただ耳を貫くだけの恐怖に変貌したりして。

夜をいくつ怯えた？

あたしは、幾度となくそんな夜を越えて、辿り着いた先がまだないことに気付いてしまった。

あたしを怯えさせるものは何？

そこに、未来を抱けない夜はいくつある？

そこに夢を見ないのはなぜ？

あたしは、いつ未来を描く？

夜は、あたしを見えない世界に引き込んでいく。

月がそこにあるように、星がそこで瞬くように。

そこに未来を描くあたしを想像していた。

いつか、あたしは辿り着く場所がある。

だって、そこには壊れたあたしがないんだ。

羊はあたしを眠らせてくれるし。

白い壁はただ漆黒を闇に変えることもなくなる。

あたしは、そこにいくつもの夢を見ていた。

月があたしを見ていた。

そこに星はなかった。

空は漆黒に包まれず、そこにただあたしは夢を見ていた。

現実がなくなる夢を、

そこに見ていた。

『夢をみなくなった夜』／E N D.

瞬きは永遠に。

カチコチカチコチ。

１０時０１分まで、あと３０秒。

カチコチカチコチ。

１０時０１分まで、あと２０秒。

カチコチカチコチ。

１０時０１分まで、あと・・・。

目を閉じるまで、あと・・・。

カチコチカチコチ。

１０時０１分まで、あと２秒。

ドキドキドキドキ。

鼓動と時計の微妙な葛藤。

カチコチカチ・・・コチ。

瞬きは永遠に。

安らかな眠りの始まりは、怯えた夜にはなかった安心感。

苺に包まれた部屋の中で、今日も微笑みは絶やさずにいた？

あたしに問うたあたしは、今日も幸せ？

雨は今日も降らずにいたし。

空は今日も鮮明な青を映し出していた。

太陽に怯えた朝には、いつも当たらない日陰を探した日々。

カチコチカチコチ。

今日も時間は進んでいた。

毎日是不変の朝の始まり。

いつもを変えてしまった夜の涙。

眠る頃には、時計の針を忘れてしまった夢の中。

もう夢は見ないと決めていたのに。

苺は今日も夢にはなかった。

現実と夢の間で、きっと明日にかけた希望の願い。

あの人は今日も幸せでいるかな。

いつものように笑顔でいるかな。

カチコチカチコチ。

暗い部屋の中で、苺の針は今日も時間を進める。

不安など、あと１０分で消えてしまう。

もう、時計なんて見ないから。

苺は今日も時間を進める。

もう夢に戻るから。

苺はいつものように、時間を進めていてね。

朝になった頃、また見にくるから。

苺は、今日も優しい香りで包んでいてね。

明日になれば、またいつもの苺部屋。

いつもと変わらない、今日の１日の終わりに。

相変わらず、今日も夢は見なかったのかもしれない。

『瞬きは永遠に。』／END.

苺鏡。

ニコニコ顔。

どんな微笑みが一番似合ってるかな。

今日はどんな笑顔をしてみようか。

あの人は、いつも笑ってる。

あたしはきっとそんな笑顔を見て、毎日が幸せなのかもしれない。

あたしの笑顔はどう映ってるのかな。

今日はどんな笑顔になるだろう。

優しい笑顔。

楽しい笑顔。

安らぐ笑顔。

友情の笑顔。

あの人には、どんな笑顔をして見せよう。

いつも大好きだった笑顔を、今日もまたあたしに向けてくれるかな。

『おはよう』

いつもの挨拶。

いつもの笑顔。

出勤前に見る、苺鏡の前でニッコリ微笑む練習。

今日は、どんな笑顔で挨拶しよう。

今日もいつもの笑顔をくれるかな。

『おはよう』

緊張しながら、朝は練習の毎日。

どんな自分になってみよう。

どんな自分になってるだろう。

毎日は、そんな小さな練習から始まっている。

朝は慌ただしくて、小さな緊張感なんて通り過ぎる時間の中ではただ毎日の大好きな時間さえも忘れ去ってしまったようで。

でも、毎日はきっとこんな感じがいい。

きっと、いつかは自分になる練習から卒業するんだ。

大好きなあの人の、大好きになった自分を見せてあげるんだ。

あの人の笑顔が大好きだったこと。

いつか、きっと。

『待ってるよ』

そんなあの人の言葉も、あたしにはまるで魔法をかけられた毎日の夢の中。
苺鏡を閉じたら、いつの間にかニッコリ顔。

「おはよう」
今日も、相変わらず緊張笑顔。

「おはよう」
みんなの笑顔で、今日も幸せ。

自分を追いつめていた暗闇の夜。
眠れない日を、ただ不安から逃れるようにして見ていた夢。
眠ることさえも怯えた夜のこと。
夢を見なくなった日。
いつか、夢を見たいと思ったあの日の夜。
朝方の夢を見た日のこと。
大切な夢を見続けた日のこと。

朝は、いつも魔法がかかった夢のようで。
でもきっと、夢から覚めた現実があるかのように。
今日も笑顔で、あの人は優しさをくれる。
今日も1日頑張ろう。

「おはよう」
「おはよう」

交わせる今が、きっと幸せ。

『苺鏡』／E N D.

夢世界。

眠りから覚めなかった１日。

眠れなかった毎日のループ。

夢を見たかった夜の間。

夢喰い虫も現れなくなった夜の間。

いつか、現実から遠ざかる時がくるのかな。

あたしは、実は誰かと一緒？

もしかしたら、一人で夢を見るのかな。

孤独なんて言葉は苦手だったから、夢喰い虫の住む世界で悪夢と一緒に消してしまった。

苺畑もないと知ったし、現実から夢のない世界を追いやってしまった。

夢喰い虫は、今も怯えてる。

誰かの中で、夢喰い虫が怯えてる。

あたしの夢の中では、夢喰い虫が食べていた幸せも、誰かの夢の中では夢喰い虫が食べていた夢だと気付かずに、空虚な幸せを感じながら夢を見ていたんだ。

どこかにいる、夢喰い。

今日も、忘れてしまった夢喰いの話も、今では眠り続けた１日を夢だと気付かずに眠っていた夢の話。

眠りから覚めると、１日は夢の世界でいっぱい。

夢喰いなんて、もう知らなかった。

苺畑なんて忘れるくらい、夢の世界でいっぱい。

また、１日の夢が始まる。

夜も、朝も、星も、太陽も、月も、空も、風も、雨も、雲も、匂いも、風景も、記憶も。

それは、夢の話？

それは、現実の中？

夢は、いつか現実に戻るだなんて。

怖くて考えられなかった、そんな空想世界。

現実を夢に変えた人もいるんだって。

そんな人って、どんな人？

怖くて、想像もできないくらいの夢世界。

夢の中には、風船が浮かんでるらしい。

夢では、想像のない世界があったらしい。

眠れない夜の間も、眠り続ける１日の間にも。

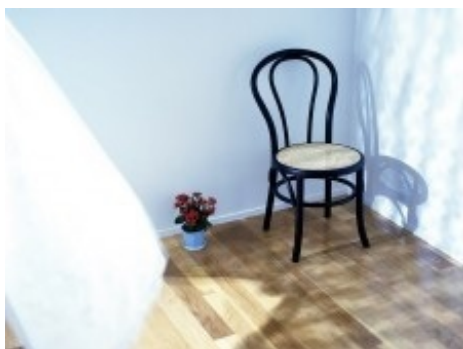
夢は、どこかに存在してる。

あたしの夢はどこにあるんだろう。
誰かに見られることもない、あたしの夢世界。
扉なんて、いっぱいあった夢世界。
どこから開くのかなんて、考えもつかなかった毎日の夢の間。
誰かの夢と勘違いして、扉に鍵がついてたことにも気付いて。
怖くて、自分の夢を探した夜の間。
風船は浮かんでなかったし。
空のない世界に行き着いたこともある。
雨は降っていなかったし、虹のかからない夢世界。
また、夢を見なくなった夜の間。
夢喰い虫には怯えずにいたけど。
毎日、夢に近づく午前2時の夢世界。
朝に近づくための、夢の世界。
怯えるために、夜は続くの？
いつか、朝がくるために。
いつも、何かのために夢を見なくなる。
誰かはきっと、夢を見なくなる。
幸せは、何のためにあるんだろう。
いつか、幸せは夢を見るのかな。
いつか、誰かのために夢はあるのかな。
風船は浮かんでる。
空は輝いてる。
雨は降らない。
虹はいくつもかかっている。
誰かのための、夢世界。
夜を越えるための、夢世界。

みんな、夢を見てるから。
夢喰い虫は、いつしかどこにも存在しなくなっていた。

『夢世界。』／E N D.

END.



左利きの彼女の奇妙な世界。

著者：七瀬佑衣

電子書籍プラットフォーム：ブクログのpapier
運営会社：株式会社ブクログ